

岡崎の「景色」について



岡崎市副市長

中 安 正 晃 氏

教育随想



月報 岡崎の教育

平成25年10月1日

10月号

発行・編集 岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
岡崎市副市長	
中安 正晃氏	
この人に聞く	2
三河仏壇伝統工芸士会幹事 彫刻師	
石川 博紀氏	
羅針盤	2
秦梨小学校長	
市川 松男	
ふれあい	3
翔南中	
佐藤 博	
特集	4
理科作品展60回	
技術・家庭科作品展40回	
～計100回のあゆみ～	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
教職員プラスバンド	
(昭和14年)	
この本を	8

日本でも、外国でも、どこの町にも、その町を代表する「景色」があります。それは、例えば、お城や古い寺社など歴史的な建造物であったり、現代的な街並みであったりします。そして、多くの場合、その「景色」が、まちの特性そのものを端的に表しているのです。

岡崎を代表する「景色」は、菅生川と、その河畔に立つ岡崎城の天守閣です。豊かな菅生川の水面と河川敷、堤防に植わった桜並木や松の木、奥にたたずむ岡崎城の天守閣は、美しい自然や長い歴史、そして、大事に守り継がれてきた伝統と共生している、故郷岡崎のイメージそのものだと思います。

しかし、この「景色」も、昔からずっと同じだったわけではありません。

戸時代からあったのですが、昔の菅生川は堤防や河川敷が整備されていなかったもので、一見、このあたりは湿地のように見えたのではないでしょうか。

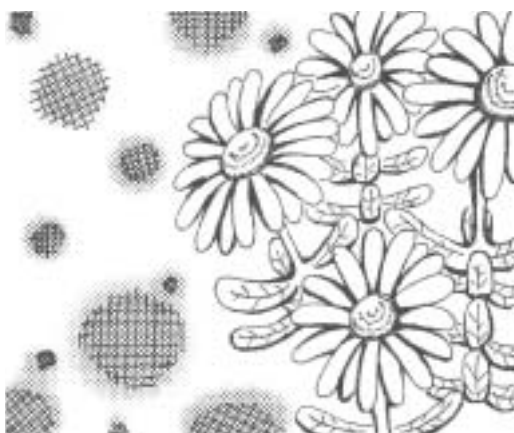
また、そこまでさかのぼらなくても、ほんの数十年前の写真には、大勢の人がボートに乗って遊んでいる、現在と全く違う印象の菅生川の「景色」が写っています。

時間がたつても変わらないと思える「景色」も、実は少しずつ変化しているのです。あるいは、その時代の住民の方々が「景色」を作ってきたと言えるかもしれません。

今、将来に向けて、菅生川の空間をどう整備していくかが、岡崎市の大きな課題になっています。先祖か

ら託された菅生川と岡崎城の美しさを守りつつ、岡崎を代表する「景色」をどう描いていくか、ぜひ次代を担う子供たちにも、一緒に考えていただきたいと思います。

(なかやす まさあき)





再生可能なもの作り

三河仏壇伝統工芸士会幹事 彫刻師

石川 博紀 氏

「ご自宅の一階に設けられた作業場。そこに一歩入った途端、松の香りが心地よく漂ってきた。」

「これは、仏壇に使う欄間の一部なのですけど……。」

そう言って鳳凰の彫刻を見せてくださった。細部まで精巧に彫り込まれた作品を見て、妥協のない仕事ぶりに、職人の技を感じた。

「一つの作品が彫り上がったときは、本当にうれいすね。でも、次にやるときはもうちよつとこうしようとか、いつも思います。」

彫刻師としてはまだ若手の石川さんが修行を始めたのは十八歳のとき。幼い頃から祖父や父親の仕事ぶりを見て育ったので、それは自然な流れであったという。

「最初の二・三年は、道具を研ぐ練習と、小刀一本で作る『すじ雲』を彫っていました。師匠である父や祖



父の技を盗もうと、仕事ぶりをひたすら見て、覚えていきました。」

全ては先輩の技術をまねすることから始まる。そこにプラスチックを加えられるようになったとき、自分の技術になると石川さんは語る。

三河仏壇は、製造工程に彫刻、塗り、箔押などの八部門の専門職人が存在し、一つの仏壇を製作するのに一年はかかるといふ、経済産業大臣指定の伝統的工芸品である。しかし、国内の仏壇も、現在は九十%が中国など海外からの輸入であるという。

「全国的には減ってしまっているけど、岡崎には仏壇の職人さんがまだたくさんいます。何とか伝統工芸を残していきたい。そして、仏壇作りについて知ってもらいたいですね。」

石川さんの伝統を守ろうとする活動は多岐にわたる。三河地区一帯の小学校へ赴き、三河仏壇を製作する技術を紹介する活動も、その一環である。

「子供たちが、見本として作った彫刻を見て『カッコいい』と言ってくれたときは、張り合いを感じます。僕たちは格好いいものを作っている職人なのだ。子供たちから刺激を受けます。」

また、若手の職人たちと連携して、新しいもの作りにも取り組んでいる。

「何か、技術を生かした新しいものを作りたいですね。三河仏壇の技術で、こんないいものが作れるのだと、多くの方に知ってもらいたいです。」

そういつて手渡してくださった彫刻入りのキーホルダーや漆塗りのアクセサリーは、光り輝いて見えた。

「三河仏壇は釘や接着剤を極力使わず、ほぞ組みという組立式で作ります。だから二十年、三十年して傷んでくると、全部分解できてきれいにリメイクできるのです。」

大量生産、大量消費の現代社会にあつて、三河仏壇の魅力をそう話す。「壊れたらまた買いに行けばよい」という風潮には逆行しています。でも、こういう再生可能なもの作りこそが、今の時代には大切なのです。」

石川さんの仏壇作りは、常に使う人の気持ちに寄り添っている。

「人が手を合わせるものを作っていく立場にいたることが、本当にありがたいです。仏壇は毎日使うものです。『用の美』というのですが、日常の中で使いながらものの良さを知る。使ってくださいる人が、ものを粗末にしないでくださるという気持ちになってくださると、職人としてはうれいすね。」

本当に良いものは廃れず、少しずつ形を変えながらも、時代を超えて確実に受け継がれていく。生き生きとした鳳凰や、漆黒に輝くアクセサリーに岡崎の伝統産業に携わる職人の、もの作りへの気概を見る思いがした。

氏名 いしかわひろのり
生年月日 昭和四十六年一月十日
住所 岡崎市矢作町



先達から学ぶ

秦梨小学校長

市川 松男

本校の里山再生活動、ビオトープ活動に長年ご協力いただいている「山の先生」は、今年、米寿を迎えられた。学校行事の「里山レスキュー活動」などでは、チェーンソー、刈り払い機などを巧みに操作し、子供たちに働く姿を見せてくださる。自分の母校を我が家のように思い、草が生えれば草取りをし、不要なものがあれば片付けてくださる。その仕事ぶりは、計画的でとても丁寧で、そのうえ、どんなものも大切に再利用され、まさに陰で学校を支えていただいている。

「山の先生」は青年時代、満州に渡り、終戦後の辛い生活をした経験をお持ちである。日々の寝食に困窮し、いつ帰国できるか分からない不安の



「日本一の学校」

に向かって

翔南中 佐藤 博

潇洒な外観に包まれた真新しい校舎を見上げ、開校式に臨んだ初代翔南中生は目を輝かせていた。

「これが私たちの母校。」

全生徒の心に新たな目標が生まれ、ここで過ごす日々を想像して、飛躍と成長を期するものがあつたと思う。「この翔南中学校を、日本一の学校にします。」

開校式の誓いの言葉で、生徒会長のA子は、よどみのない声できつぱりと言い切った。この瞬間、翔南中学校の生徒それぞれが抱いている目標が、一斉に同じ方向を向いたような気がした。

A子ら生徒会役員七人と私との最初の仕事は「入学を祝う会」であった。企画のアイデアを次々と創出し

ていく姿に、「新しいこと好きで、超前向き」というのが彼らに抱いた最初の印象だ。準備期間が短かつたにもかかわらず、「入学を祝う会」は大成功を収め、このメンバーなら「日本一の学校」への土台を築くことができると思った。

船出は順調かと思えたが、万事うまくいくものではない。昼の放送での委員会報告、ECO委員会主催による資源回収活動など、軌道に乗ってきた活動もあるが、壁にはね返された企画もあつた。夏休みに実施を計画した地域交流行事「夏祭り」である。

「夏祭り」の開催に、とりわけA子の思い入れは強かった。「日本一に向かって、翔南中が頑張っている様子をたくさんの人に見てもらいたい」と意気込んだ。学区に住む方々をお招きし、楽しんでいただける企画を、生徒会役員で毎日話し合った。親子連れが楽しめる縁日のようなイベント、飲食物の屋台、エコ活動に関連するブースなど、具体的なアイデアがあふれ、A子たちの発案はやがて壮大な計画となった。

彼女の思いに、私もこの夏祭りを翔南中の目玉行事にしたいという思いを強くした。一大行事の実施と成功には、A子たちの強いリーダーシッ

プが求められていた。「A子たちの思いの方が、先生の思いより強くなければ、成功には導けないぞ」と励ました。

しかし、それだけの計画をどう準備していくのか。日程の調整がどうやってもできない。また、参加対象者の調整も難航を究めた。五月半ばからの話し合いは、ついに七月まで及んだ。A子は「どんなかたちであれ、成功させたいです」と、強い意志を示したが、今年度の実施は発展的延期とするしかなかった。

悔しさに肩を落とす彼らに、私は「これまでの話し合いを決して無駄にはしない」と約束した。A子は、「来年実現させて、私たちを呼んでください」と笑った。

「日本一の学校」への道は遠い。しかし、千里の道も一歩から。A子らが残した足跡は、きつと日本一への足掛かりになるに違いない。



中で毎日を過ごされたそう。復員し、ふるさとに戻って仕事がなく困っていたときに、多くの方にお世話になったことが今の自分を育ててくれたとおっしゃる。その経験から、常に周りの人が喜んでくれるように、自分にできることをする、動けるうちは動くという、この方の根っこもいえる、今の生き方を体得されたようだ。

「わしら、働けどおしに働いてきたもんは、年をとつても働いておらんと気がおさまらん。そりゃあ、もう性分だから仕方がない。誰が何といつても、働かせてもらわにゃ。」

勤勉さを身に付け、日々の暮らしの中に、知恵と工夫をこらす生き方を獲得し、貫いていらつしやるのだ。

私も、教員になり、先生と呼ばれて三十数年が過ぎた。次代を担う子供たちに、人としての生きざまを背中であれだけ伝えることができたのだろうか。他人から謙虚に学ぶ心で、人様のお役に立てるように努め、今日より明日、明日より明後日と、少しでも成長していこうという気概を忘れずに、日々を過ごしたいものである。

理科作品展60回 技術・家庭科作品展40回



～計100回のあゆみ～

岡崎市小中学校理科作品展は、今年で六十回、技術・家庭科作品展は、四十回の節目を迎える。それぞれに、岡崎市の児童生徒の「科学する心」と「創意工夫する心」を育んできた。

理科作品展は、昭和二十六年に生徒作品展として始まった。戦後の混乱期に、理科教育の発展を願って市内の小中学校から理科作品を持ち寄り、東海銀行の二階を借りて開催された。その後は、市内小中学校の体育館、レオ松坂屋や城北会館（現りぶら）と場所を変えながら、年一回開かれて、現在に至っている。

技術・家庭科作品展は、児童生徒が授業の中で製作した作品を発表する場として、昭和四十九年に城北会館で開催されたのが始まりである。現在も行われている作品発表会は、昭和六十三年から始まった中学生のためのファッションショーを元としており、生徒が自分の作品を大勢の観衆の前で発表する人気のコーナーとなっている。

平成四年、それまでそれぞれで開催されていた両作品展が、岡崎市中央総合公園武道館で同時開催されるようになった。作品の質の高さやイベントコーナーが評判を呼び、入場者数は年々増え続け、平成二十四年には、七千人を超えた。まさに、岡崎市の秋の一大イベントとして大きく発展してきたといえる。

二つの作品展は、今年、開催回数を合計すると百回となる。これまで以上に盛り上がり、「科学の街 岡崎」「匠の街 岡崎」の礎となることが期待される。






▲ 理科、技術・家庭科作品展テーマ塔（平成9年）



▲ 理科、技術・家庭科作品展合同セレモニー（平成4年）

<p>▼ 木村資生科学賞（平成11年）</p>  <p>第四十六回（平成十一年） 「木村資生科学賞」を創設 弘子夫人より直接賞状と盾が授与される。 第五十五回（平成二十年） 「未来の科学者賞」を創設 第五十六回（平成二十一年） 「サイエンスショー」を実施 第六十回（平成二十五年） 木村資生博士受賞「ダーウィン・メダル」を展示</p>	<p>▼ 作って遊ぶコーナー（平成元年）</p>  <p>第三十九回（平成四年） 技術・家庭科作品展と合同開催 会場を中央総合公園武道館に移す。 第四十四回（平成九年） 「新テーマ塔」が完成 第三十七回（平成二年） 「収蔵作品」を開始 第三十一回（昭和五十九年） 「研究発表」を開始 第三十回（昭和五十八年） 「国研コーナー」を開設 三十回の記念として、岡崎国立共同研究機構よりパネル展示などの協賛を受ける。 第二十一回（昭和四十九年） 「遊ぶコーナー」「作るコーナー」（現・作って遊ぶコーナー）を開設</p>	<p>▼ 研究発表（昭和62年）</p>  <p>理科作品展の六十年 第一回（昭和二十六年） 生徒作品展として、東海銀行二階にて開催 第二回（昭和三十年） 夏休み作品展として再開 これ以後、市内各小中学校の講堂や体育館などで開催する。 第七回（昭和三十五年） 「理科の研究」第一集を発刊 作品展に出品した作品を記録として残し、研究の参考とする。 第十九回（昭和四十七年） 「特別コーナー」を設置 第二十一回（昭和四十九年） 「遊ぶコーナー」「作るコーナー」（現・作って遊ぶコーナー）を開設</p>
--	--	---

<p>第四十回（平成二十五年） 未来社会を夢見た子供たちが描く絵を展示</p>	<p>第二十五回（平成十年） 「岡崎市ロボットコンテスト」を開催 第三十三回（平成十八年） 「技能コンテスト」を開催 第十九回（平成四年） 理科作品展と合同開催 会場を中央総合公園武道館に移す 岩津高校が参加を開始 第二十四回（平成九年） 「新テーマ塔」が完成 第十八回（平成三年） 岡崎工業高校が参加を開始</p>	<p>技術・家庭科作品展の四十年 第一回（昭和四十九年） 城北会館にて開催 第三回（昭和五十二年） これより、岡崎市体育館・竜美丘会館・岡崎商工会議所と場所を変え開催する。 第十五回（昭和六十三年） 「中学生のためのファッションショー」（現・作品発表会）を開催 第十四回（平成二年） 岡崎工業高校が参加を開始</p>  <p>▲ 中学生のためのファッションショー（昭和63年）</p>  <p>▲ ロボットコンテスト（平成12年）</p>
---	--	---




▲ 三菱電気自動車「i-MiEV」

理科、技術・家庭科作品展の開催回数合計100回にあたる今回は、「科学と技術の結晶」の象徴として、電気自動車を特別展示する予定である。
当日は、電気自動車の大容量バッテリーから作品に電力を供給する。非常時の電源としても期待されている蓄電能力を間近で目にすることができる。

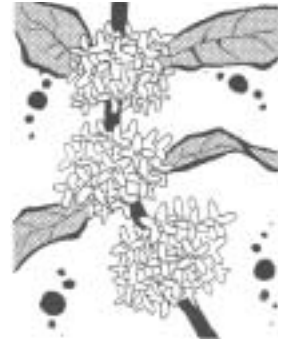
作品展に参加して

<p>平成23年技術・家庭科作品展「技能コンテスト」</p> <p>中学1年の時、家庭科技能コンテストに出場しました。貴重なこの経験から、家庭科への意識が高まり、2年で給食メニューコンクールの入賞ができました。 福岡中学校3年 南田菜月</p>	<p>昭和51年理科作品展「学校代表」</p> <p>夏休みの間、毎日欠かさずスケッチして観察記録を書いたことを覚えています。苦勞をして、大きな模造紙に結果や考察をまとめ終えたときの充実感がいい思い出になっています。 男川小学校教諭 稲垣裕子</p>
--	---

▲ 技能コンテスト（平成19年）



お知らせ



●教育最新情報

○研究発表会案内

今年度は、小学校四校、中学校二校で、研究発表会、授業研究協議会が開催される。

常磐南小学校と六ツ美中部小学校は、市研究委嘱による発表で、どちらも初任者研修を兼ねる。

本宿小学校と竜海中学校は自主発表で、授業研究協議会を行う。竜海中学校は初任者研修を兼ねる。

また、葵中学校と連尺小学校は授業公開と協議会を行う。

各学校の発表日と、研究主題及び研究の概要は次の通りである。それぞれの研究の成果を学び、今後の子供の指導や学校作り、実践研究に役立てていきたい。

◆岡崎市立常磐南小学校

十月十六日(水)

※市研究委嘱(H23)

「未来へつなごう 常南のこころ」ESDの視点に立った教育活動の展開」

地域を愛するところを育むことを通して、持続発展可能な社会づくりの担い手となる子供の育成を目指してきた。

学区を教材化し、地域のよさを見つけることで愛着と誇りを抱かせる。そして、問題点を改善する方法を考えることで、地域をより発展させようとするところを醸成してきた。

当日は、雅楽・和太鼓の発表、生活・総合の授業公開、すてきミーティングを行う。

◆岡崎市立六ツ美中部小学校

十一月二十二日(金)

※市研究委嘱(H23)

「明るいま未来をひらく六ツ美中部の子の育成」環境学習を基盤にしたESDの推進」

ESDの視点に立ち、環境学習を土台に教科、領域等で他学年とのつながりを明確にし、教育課程を編成してきた。

身近な地域の教材を掘り起こし、地域の人々から学び、様々な問題を話し合う。自分事として考え、地域を愛する心豊かな子の育成を目指す。

「今を調べ、未来を考える」探究学習の授業構成に取り組んだ。当日は、全学級の授業公開、授業者と語る会を行う。

◆岡崎市立本宿小学校

十月十一日(金)

※自主発表

「生きる力を育む小学校英語の創造」2023「英語が話せる本宿っ子をめざして」

子供が自分の思いや考えを英語で伝え合い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿を追求して研究五年目を迎えた。

当日は、Eタイム(DVD視聴)と英語活動の授業公開、授業を語る会、文科省調査官直山木綿子先生の講演を行う。

◆岡崎市立竜海中学校

十一月十三日(水)

※自主発表

「自ら学び、表出する生徒の育成」コミュニケーションを取り入れた教科学習を中心に」

コミュニケーションの行為が、生徒一人一人の「高め合い」「深め合い」の場となるようにするため、他との「かわり」や「つながり」を意識した活動を意図的に取り入れた授業を計画する。生徒の主體的な学びをさらに広げられるよう、実践研究に取り組んでいる。

当日は、授業、CMT(振り返りとコミュニケーション活動)の公開、教科別協議会を行う。

◆岡崎市立葵中学校

十月二十二日(火)

※授業公開

「学び合い・磨き合いを軸にした、思考力・判断力・表現力の育成」ICTの幅広い活用法と、生徒が自ら求めてICTを活用する場の追究」

タブレットPC、ノートPC、大型モニター、書画カメラなどのICT機器を効果的に用いながら、学び合い・磨き合いの場を学習の中に設定し、生徒の思考力・判断力・表現力の育成をめざす。

当日は、全教科・領域について公開授業を行い、教科別協議会を行う。

◆岡崎市立連尺小学校

二月十四日(金)

※授業公開

「ESDの視点に立ち、算数を楽しむ子供を育む岡崎・連尺モデル」コミュニケーション能力を確かな思考力へ」

筋道立てて考える児童の姿を求めて、算数の教科書を中心とした、四十五分の授業による問題解決学習『岡崎・連尺モデル』の実践検証に取り組んできた。

当日は、授業公開、授業協議会、文科省調査官笠井健一先生の講演を行う。

●表彰

◆平成25年度全日本中学校総合体育大会

バレーボール男子

ベスト8 矢作北中学校

優秀選手賞

矢作北中三年 真子康佑

※その他の出場校

バレーボール

男子 竜南中学校

男子 矢作中学校

女子 南中学校

陸上競技

男子走高跳

八位 矢作中三年 久保快斗

男子砲丸投

七位 矢作中三年 白藤聖陽
女子走高跳

五位 城北中三年 浅井さくら
◆第29回わんぱく相撲全国大会

わんぱく闘脇
竜美丘小六年 上條深能
◆第4回全日本女子相撲大会

三位 六美北中三年 佐野清香
◆第35回東海中学校総合体育大会

バレーボール
男子 二位 矢作北中学校
三位 竜南中学校

剣道
男子個人戦 優勝 矢作北中三年 片神明信

陸上競技
男子四〇〇M 優勝 竜南中三年 西田悠人

男子走高跳 二位 矢作中三年 久保快斗

男子砲丸投 優勝 矢作中三年 白藤聖陽

女子一年八〇〇M 優勝 矢作中一年 細井鈴菜

女子走高跳 二位 城北中三年 浅井さくら

水泳競技
男子二〇〇M個人メドレー 優勝 城北中二年 中濱亮太

女子二〇〇M背泳

優勝 矢作中三年 宮島夏希
◆東海吹奏楽コンクール

銀賞 美川中学校
◆第67回愛知県中学校総合体育大会

バスケットボール
男子 二位 北中学校

バレーボール
男子 優勝 矢作北中学校
二位 竜南中学校

女子 三位 矢作中学校

陸上競技
男子総合 優勝 矢作中学校

男子四〇〇M 三位 六ツ美北中学校

優勝 竜南中三年 西田悠人

三位 北中三年 藤嶋一輝

男子一年一五〇〇M 優勝 甲山中一年 荒木幸平

二位 甲山中一年 藤原隆公

男子三年一五〇〇M 三位 翔南中三年 山下和希
男子一〇MH 三位 六美北中三年 中西潤
男子走高跳 優勝 矢作中三年 久保快斗

男子走幅跳

優勝 翔南中三年 大久保光祐
男子砲丸投 優勝 矢作中三年 白藤聖陽

男子共通四種競技 優勝 美川中三年 柴田一瞬

女子二年一〇〇M 二位 六美北中三年 山本里菜

三位 城北中二年 水上真里

女子一年八〇〇M 優勝 矢作中一年 細井鈴菜

女子八〇〇M 二位 常磐中二年 宇野佑紀

女子走高跳 三位 美川中三年 原 侑子

女子走幅跳 二位 竜南中二年 軒村香穂

水泳競技
男子四〇〇MメドレーR 二位 河合諒哉・渡辺 輝

優勝 城北中二年 中濱亮太

男子四〇〇M個人メドレー 三位 城北中二年 中濱亮太

女子一〇〇M背泳ぎ 三位 矢作中三年 宮島夏希

相撲

個人の部 三位 葵中三年 中村恭輔
バドミントン 個人女子複 三位 六ツ美北中学校

中根星彩・山本未来

◆平成25年度愛知県吹奏楽コンクール

A編成 美川中学校
金賞 竜南中学校

B編成 甲山中学校
金賞 美川中学校

◆第56回中部日本吹奏楽コンクール愛知県大会

大編成 美川中学校
金賞 竜南中学校

小編成 南中学校
金賞 甲山中学校

◆NHK全国学校音楽コンクール愛知県大会

金賞 三島小学校
六ツ美北中学校

(二校とも東海北陸大会出場)

◆愛知県合唱コンクール
金賞 六ツ美北中学校
(愛知県代表)

◆第43回愛知県野生生物保護実績発表会

愛知県知事賞 生平小学校
愛知県教育委員会賞 宮崎小学校

東海中学校

◆平成25年度少年の主張愛知県大会

奨励賞 新香山中三年 榎本真帆

◆第26回岡崎市中学生の主張コンクール

優秀賞 南中三年 浅井ゆうみ
新香山中三年 榎本真帆

竜南中三年 杉田紗於里

翔南中三年 栗田泰拓

◆第54回岡崎市小中学生英語スピーチフェスティバル

一般の部入賞 南中三年 朝稲磨美

福岡中二年 中瀬未来

河合中二年 鈴木開登
常磐中二年 佐羽内亜海
常磐中三年 中根由紀子
竜南中三年 中川 董
北中三年 秋尾嘉孝
六ツ美北中三年 福澤 心
翔南中二年 横井大地
附属中二年 柴田まど佳
帰国子女の部入賞 竜海中三年 福井凌太郎

・カ
ツ
ト
竜美丘小
成田 絢香

教職員ブラスバンド (昭和14年)

写真提供：羽根小学校

昭和十一年度開校の羽根小学校には、開校当時から教職員によるブラスバンドが結成されていた。

写真は、昭和十四年の教職員ブラスバンドの集合写真である。当時の教職員集合写真から類推すると、全職員のおよそ半数の者が、音楽活動を進めていたことになる。また、同時期には、児童による「少年ラッパ鼓隊」の記録もある。

現在も、学芸会や文化祭で教職員の出し物として教職員バンドが活躍をする学校がある。そのルーツは半世紀以上の昔からあったと言えるのかもしれない。



岡崎市「理科作品展」と「技術・家庭科作品展」。合わせて百回を迎える。双方の長い歴史を支えてきた諸先輩方の思いはどれほどだろう。今年も会場内には、市内の児童・生徒の作品が展示され、来場者を楽しませてくれることだろう。この中から、世界に通じる科学者・技術者が誕生することを期待している。

職人の伝統の技が、祖父から父へ、父から息子へと確実に受け継がれている。「ゼロから始めるのではなく、先人の技術があつて、その上に自分の技を作る」。石川さんは、そう話す。遠い昔、先生から教わったことを、今は立場を変え教えている。時代は変わっても、大切なことは今も昔も変わらない。

シ オ ス ア

澄みきった青空が広がるグラウンド。色とりどりのクラス対抗横断幕が翻り、歓声にあふれた体育大会。その余韻冷めやらぬまま、今度は文化祭だ。合唱コンクールでは、それぞれの学級でドラマが生まれる。雨降って地固まることもあるだろう。行事一つ一つが個性を發揮できる場であり、学級の絆をさらに深める。

朝夕の風に、秋を感じるようになった。どこからともなくキンモクセイの香りが漂ってくる。過ごしやすいこの時期、ウォーキングをする人をよく見かける。私たちも、健康づくりには気を配り、秋を楽しみたい。



*兵士は起つ 杉山 隆男
新潮社 ¥1,680

この一文
「おとうさんが死んで帰ってこなくても おかあさんを助けて生きていくなだよ」

3・11の大震災後の惨状は、映像で繰り返し見てきた。本書には自衛隊員がいかにかに過酷な状況で、命がけの救助活動に当たっていたかが克明に綴られている。雪の中の水につかり活動を続けたことや、多くの遺体捜索や収容に当たった若い隊員の精神状態など、彼らの勇気と使命感を思うと正に畏敬の念で胸が一杯になった。自らの家族の安否を確認できないまま活動を続けた隊員の強さは、日々の訓練や職務への覚悟の表れであろう。強い意志や使命感の大切さを再認識させてくれる書である。

- *時間を忘れるほど面白い雑学の本 竹内 均
三笠書房 ¥600
 - *「ごちそうさま」を英語で言えますか デイビット・セイン
アスコム ¥1,000
 - *零 戦 堀越 二郎
角川文庫 ¥580
- 羽根小 松崎 出